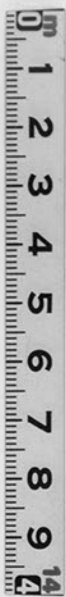


# 無軌道

第四輯



玉葱の日日

世界戦後

知つた事

カアル・サンドバーク  
YASCOLASKEDY

詩一つ

猪狩

高瀬勝男

チャップリン

横地正次

猪狩満直

あゝわれ太陽を欲す

上野英夫

三野混沌

木の下から

三野混沌

三野混沌

青梨

上野英夫

三野混沌

歌題

三野混沌

三野混沌

無題

三野混沌

三野混沌

雑記

三野混沌

三野混沌

北海道通信

三野混沌

三野混沌

後記

三野混沌

三野混沌

玉ねぎの日日

カアル、サンドバーク

ガブリエル・デオヴァニツチ夫人は頭の上に薪を

載せて

毎朝九時にブオリヤ街をやつてくる

彼女の眼は彼女の年とつた脚が道を間違ひないや

うに眞つ直ぐを見てゐる

仲間の不注意から夫はトンネルの爆發で死んでし

まつた、彼女の義理の娘、ビエトロ・デオヴァ

ニツチ夫人は

ブラウニヤングキルのジャスバア氏のために玉葱

をとつて一日十時間、時には十二時間働いてゐ

る

ビエトロ・デオヴァニツチ夫人、彼女は朝の五時

半に電車にのる、そして一日の賃金をもらつて

ジャスバア宅から夜の九時と十時の間にかへつ

てくる

先週、ビエトロ・デオヴァニツチ夫人はジャスバ

ア氏のために玉葱をとつて一箱につき八錢もら

(1)

つた。今週、ジャスバア氏は一箱六錢に値下げし

た。澤山のおかみさんや少女たちがデエリー・

ニユースの廣告に答へるからである。

ジャスバア氏はラヴェンスウイドのエビスコオバ

ル教會に属してゐる。そして日曜には、彼の聲

に合はす兩側の娘達どいつしよにナイスキ典を

歌ふのを喜ぶのである。

牧師が日曜の古い説教を繰返すときには、ジャス

バア氏の心は、彼の七百エーカーの農場と如何

なしたらもつと充分に産出できるか、に迷ひ出す

のであつた。

そして時々彼はデエリー・ニユースの廣告に附け

加へたら、もつと澤山のおかみや少女を彼の農

場に引つぱりこみ管理費を引き下げられるだらう

かどうかと思ひ廻らすのである。

ビエトロ・デオヴァニツチ夫人は人生を絶望して

はゐらない。

彼女の喜びは三ヶ月のうちに彼女のところに着く

彼女の知つてゐるその子供にあつた。

(2)

そしてどんなにして子供たちが冬の朝バスケット  
球をもつて豆やコーンミールや糖蜜を村役場にも  
らひに行くだらうか

私は人々がこゝに小説のいい材料があるとか、そ  
れを戯曲に書けるとかいふのをきく

私は言ふ。薪を頭にのつけて朝の九時にビオリヤ  
街をやつてくるガブリエル・デオヴァニツチ老  
夫人を戯曲の中に投げられることのできる現代  
作家はゐない。

草野野矢心 平譯

### 世界戦後のザメンホフの生誕日に

今、武器と男子とに就て、平和の戦ひに就て我ら  
の歌は心の底から高らかに鳴り出す！  
それは彼が奇蹟を創り出したからだ  
聖人間民族を愛に依つて合一する奇蹟の基礎を。

今、武器と男子とに就て、平和の戦ひに就て我ら  
の歌は心の底から高らかに鳴り出す！  
それは彼が奇蹟を創り出したからだ  
聖人間民族を愛に依つて合一する奇蹟の基礎を。

世界から障礙物、憎悪、戦争等の驅逐  
彼は高く輝かしい目的への道を示さうと希つた  
そして救済の、而もすばらしき道を示した！  
だが、悲しい哉、その諫言が向けられたのは豊の  
耳だつたと思ふ

「おゝ我が心よ！」と、苦痛に捉はれて彼は歌た  
●全世界の爲めに痛んだ偉大な荷い心算  
それは殺戮的な世界の爲めに血を流して鞭打つた  
又、火のやうな苦痛ながらに愛し憐んだ

温和で謙讓な而も強くて決斷的な男、  
運命の數ある打撃も人の不實な嘲笑も  
彼の火のやうな意圖に對して障礙にはなれなかつ

彼は希望と頑張と耐忍とを以て組打つた  
そして彼は戦ひのうちに死んだ、サトベルさへ無  
しに

軍馬はその屍體の上を疾驅した  
「恐怖」は彼を打負かし彼の眞新しい墓の上に

人々は神の名に於て集堆つた屠殺を整理し――  
權力ある者はある程無力者を喰ひつぶすのか――  
見よ、われ一ハンガリヤ人を、心にあらゆる打撃  
をうけて

血の全滴りと涙の全滴りとをたへへ……  
われは親愛なる國土に強く根を張つて  
わが全力はそこから吸りとられてゐるのだ  
そしてわれは希ふ、その藝術を風態を文化を平和  
な世界競争絢爛のうちに共榮あれと――  
美しいものはその死を以て滅ぶるであらうからだ  
宛も虹の一つの色彩が消え失せるがやうに  
われは同胞を抱き擁せん爲めに腕を伸してゐる  
飢えながらも同意し、渴れても理解し……  
……そして和かな手まで眞直ぐに引伸す  
掌はゆるませないが――拳固は只威嚇であるが――  
泣き沈む呼聲は沙漠の中に消えてゆく……

(3)

悪魔的狡猾が外交の風習であり――  
巧妙な死を輝かしい光榮が飾るのか――

泣き沈む呼聲は沙漠の中に消えてゆく……

(4)

おゝわが乾ける咽喉を壓迫する息苦しき  
心情を攪亂する恐るべき大異變——  
わが愛する國は深淵にもがきながらに……

おゝその頭上を Danckless の劍は脅し……  
更に約めの爲めに人々は國土を賣る……  
そしてその引裂かれた肉體は泣き、呻き、啣つて  
——ある人……  
宛も母親の墓石にとりつく孤兒のやうに……  
然しながらわれは瀆神せぬ、呪咀をせぬ……  
既に紐で括られた兩腕は長い間伸してゐる  
今彼らを絶望の最後の振り出發のところだ  
われは受難の海から叫びながら引上げるのだ

おゝ汝平和の戦ひの祝福すべき精神よ……  
國民的虛空にある地獄を消滅させう……  
絶望の暗闇にある汝の光明を電の如く光らせろ  
そして肉體の引きちぎれた虎を恐怖で走らせろ  
不和と嫉妬との青眼の虎……

國家的掠奪本能の、裏切的狡猾さの……  
それは涙の涇泉を終に枯らせ  
そして一は羊の群れに、他は抱物の金に……

全ての國は肩と肩とを並べて仕事をし……  
愛の涙のボンは彼らを力強く編み合せる……  
そしてあなたの上には尊敬の涙に飾られた墓石を  
平和の鳩は鳴り響く翼を擴げて飛び出せ  
そして Dingo の饗宴の如く一度に……  
威喜の熱狂的讚詩は地上を怒號しろ……  
そして途には明るい緑の星の標の下  
來れ、おゝその時地上に天は來れ……

中野 勇 雄譯

### 知 事

高 瀬 勝 男

自然とは芽が出花が咲き風が吹き雪が降り月が出ることである  
人間は常に此れを知り春夏秋冬このなかで生殖し推理し戀愛し生活を造つてきた……  
感覺した創造した憧憬したあらゆる自由を自然は人間達に解放する、天地我にありと絶叫し得る歡喜  
開放する理想また大我である

隣人と語りてうまず、愛また自然のなかに育す  
自然は生々きとして循環すれば人達も自然と共にあり太陽系をめぐりて地球を掘進するそれでいゝの  
だ、作物に肥料をうんとくれておけ肉體は食物を要求する

祈りは生産にあるのだ、如何に哲學が論理で究明し、如何に宗教が純情で、如何に藝術が絶大であつ  
たとしても、自然のもつ一部をさへ未だ語り得たのを私は知らない、廣汎であり無窮であり、偉大な  
る自然に人間の腦漿は餘りに小さいのだ

自然の秒間が新鮮な意識の母胎でないか……  
近づいてゆけ、溶けるだけ自然にとけこんでゆけ、……  
其處には一切が創造であり、生きたし生けるものゝ營みでないか……  
雜草も樹木も繁殖する、蕃殖する土の精神……

(5)

土の精神に違背して文化を讚美する怯懦な心持が辱かしくないのか……  
聰明な廿世紀の人達……  
田野に工場を建てた文化が人間の努力であつても……  
都會が美しく女王の褥であつても、なんてみすばらしい人間の投影なんだらう……

(6.)

人王がどんなに愚劣であるか現金と機械の労働が休眠を齎らしはしないのだ敷石のない大厦に、蜚集し小さな科学が真であつたら、自然は哄笑するだらう  
 裸で生れた人間が、裸で洗禮をうけ己れが地上にたつた時母から乳をわけられ、土から食物をわけてもらつた人間には所有がなくつてゐた  
 誰も支配者でなく誰も命令者でない私であつた  
 生産者だつた、敬虔な祈り人 自然人から段々文明が悪魔を呼び出して自由生活が複雑になり、労働が苦痛であり、利害が生活の中心であり、貴族が生れ、奴隸が生れた、詐偽し、怠慢し搾取するものと搾取されるものとが地上に神の掟の如く定められた  
 馬鹿げたことではないか  
 乞食が厨屋に立つ時、酒場と劇場が繁昌し  
 昨日も今日も無数の無数の男達、女達が、呪ひ、悲み、わめき地上にのたうちまわる  
 裁判官、辯護士、資本家、労働者、仲買人、小賣人  
 自然は飾りつめた硝子窓からは入つてきはしないのだ  
 自然は美しくしい  
 自然は恒久だ  
 不可解で不可解でない神秘  
 遠い昔太陽の二つあつた、物語を教へた自然は萬億の生律あるいきづきの音ですこやかに動いてゐる  
 休む事なき自然の言葉は百姓は業して聽く

高 藤 樹 畏

詩 一 つ

猪 狩 満 直

窓もドアもすべてが開つてばなしだ  
 開けつはなしした小屋の窓から  
 飄々と風が這入つてくる  
 そして飄々と出てゆく  
 野草の香氣をはらんだ  
 午前労働に勞れたおれは  
 荒庭の上にながしと足を伸した  
 風をあびながら 裸で  
 おおこの瞬時  
 おれたちの國がはつきりとつかめる

チャップリンを標本にした奴等の構成派藝術論  
 チャップリンから詩を抹殺したら三錢切手が残るだらう  
 彼は何を皮肉り何を嘲笑し何を輕蔑したか  
 彼等は避暑に行つてることだらう  
 メキシコやロッキーマウンテンで腸詰の冷しでも喰つて  
 君達は三錢切手をポストに入れて済まして歩く  
 それから乾盃だとか何だとか帽子を振つて鏡をかきあつめる  
 お目出度いアメリカニズムだと仰言る  
 お嬢さんの網目の髪に微笑したりする  
 チンドン屋の翳問屋の額叩き奴  
 映寫幕に消へてから樂屋でネクタイを結びなほす  
 逢曳に出かける馬鹿野郎  
 土曜日の次は日曜日の次は教會から煽動者から遊  
 動圓本のやうにはね廻る  
 チャップリンのやうな晴天のやうな散歩者共

(7.)

横 地 正 次 郎

チャップリンは人氣がある  
 彼奴は得意な空腹と夕暮にマッチをする  
 隣のはひを彼奴等は狂喜する

キサマ達の面へ唾を吐きかけるのも面白い  
キサマ達の肩へ泥をなすりつけるのもた易い

### あゝわれ太陽を欲す

上 遠野英夫

壁だ、空間に高く、高くそびえ立てられた壁だ。空は一面に被はれ、太陽からわれらをさへぎる目にも見えない大なる牢獄だ。心の中の惨めな獄舎だ。生活だ。かたい、かたい鋼鐵の輪のいくつもいくつもの連らなつた重たい鎖だ。

ふさちぎれ……その鎖。  
ずたずたに破り捨てろ。

力がないか！力、力、狂暴な暴風雨は来ないか

眞晝はまたまらなくおれの肉體を壓へつける  
太陽は烈々と光れど、それはもはやわれらのものではない。このむごたらしい牢獄のものだ。一切をわれらから奪ふ彼等のものだ。

青い野原・山

緑の田甫・森

その中のたゞ一點のしみとなつて  
おれは今土手に腰を下ろす

キサマ達の狂喜の發作へ鉛をつぎ込むのも面白い

高く晴れた空

一條の直線に日光は飛んで散り、  
樹々の葉蔭に

冷たいイリュージョンはただよふて  
おれは今憎悪を樹肌に刻む

悲痛・土塊の沈黙

生活を新しく切り開きたい深刻な慾望

清らかな大氣を抱いて

もろ手は今空間にふるへてゐる

畑の土のむれむれと吹き出すこの土息のたまらなさ、汗をふいて緑陰にいこふひとよきの喜び、あゝけれどもこのときほど自分のみじめさを感ずることはない。自然の美と恩恵を思ふ前に、何故おれは己をあはれまねばならないのか

己の生活に對し、己自身に對する自嘲とれんびんとは、やがて深刻な憎悪となり憤激となる  
ああ。

壁だ。壁だ。矛盾だ。鎖だ。牢獄だ。

眞晝の憂鬱は青白い月光を伴はない。灼熱の焰の中にくすぶる暗紫色の憤激のみだ。  
妄想——否、これこそは叫である、すべてである。眞晝のどよめきである、奔流である、飛躍であ

る、火華となつて飛び散る己の分身である。

暗闇の中に窒息され

充ちたちたギマンに精神は壓死され

呂鈍な理性は固たく鐵の假面に閉ちこめられてゐる

肉體はおしひしがれて

やせこけた殘骸である

あゝかゝるとき

われは太陽を欲す

己の周圍を

幾重にも幾重にも取りかこめる

夜霧の如き生活は

散り、くだけ、飛び、流れ、消ゆるものを

地にはうてギョギするものゝ光明は呪咀と、壓迫と、宿命の謠念のあなたに枯渴した真理である。

(春の大氣をゆすりつゝ飛ぶ鳩のはばたきはないかそのとき光は甦へるであらう)

暗黒は惨忍な事實である、あらゆる因襲の衣をまとへる王者の武器。

(おゝ憎むべき汚辱に尙黙々たる啞者の様は觀念への反逆ではないか)

道徳は傳統の美々しい甲冑を被はれ民衆のまなこをくらし、犬の様に絶望と虚無のあなたに吠え

てゐる。

(滅びゆくものゝ刹那のもだへであり、永遠への葬送曲の階音である)

あゝ、

けれどもわれらの太陽は黒雲のあなたにある。

太陽への切望、太陽への切望、この切ない願望は情熱を馳せて有頂點の亂舞をさせないと言ひきる

ものがあるか。

鋼鐵の焰の様に、すさまじい力に燃えさかる意欲は、炎々とほとばしり、巻き昇り、冲天を突きぬ

けて、君臨する太陽を地上に引き下ろすだらう。

あゝわれいま太陽を欲す

### 木の下から

### 三野 混沌

川岸に奴等がゐた

暑くて俺も奴等の間に行つて木の下で休んだ

「どうだえ、ふふんやつぱりか」

「しなびつきに着いてるけえ、百姓が一體どうし

んでえ、欠損でえ」

「畑は高くつても安くつても黙つてゐべえ、高く

つたからつてすぐひつこぬいて賣るわけのもんで

ねえかんな

「へへえ、いいころなるまでだよ」

俺はあん畜生等を憎み始めた

百姓にいいかげん金を掴ませて、生々した生産物

をしつこくつて終へやがる

午後からは遊んで食つてゐべえ

そいつ等が俺等が晩まで稼ぐ時半寝てやがると

思ふ

酷いものがあつて、顔にまめ出してゐるのが、百姓

達自身の人情を引くのが

そいつが競争市場を營んでるだ——單位錢から  
 そいつが又、小供や女相手なんだ——單位錢から  
 みんな望んでゐるとこは、どここの組合だ、賞  
 與だ、手前みそだ、そして勿論、一時的な黨勢  
 運動は、あれなと外すんばむかれる  
 成し得ねえ分子の雲でけつかるわい  
 目茶苦茶に離れて行つちやつた  
 市場をつくり上げろ、いい交換市場を——  
 欲しいもの持ち、なくてなんねえものを持つて來  
 させすれあ

俺等の働きあ愉快でたまらねえだ  
 そいつをどつから始まつていいか解りあがらねえ  
 奴等に、何より俺達のために  
 不賣同盟ではねえ、共同購買ではねえ、信用組合  
 ではねえ

青 梨

三野混沌

町の四角のかんぶつやの前へ  
 どつかと樹木籠をおろすと  
 脊の高いかんぶつやの親父が出て、立つて見てゐ  
 たよ  
 「これ食へるか」て一つ青梨をとつて庖刀でむき  
 始めた  
 二十五錢位だ  
 三十錢位と思つて持つてきたんだ  
 かんぶつやの親父は食べながら「これではいいよ  
 し買つてやるべ、皆はかつせえ」  
 「よしか」俺がはかつて終ふと親父金を拂つてし  
 まつた  
 暫らくぼんやりしてたが「これがはしりなんだに  
 こんなで値はいまにどうなるか」ていふた  
 ひとつはまだ早生を出してゐる  
 薄地の上ではもう中生物が熟れ始めて出る  
 肥料とバンに追はれ  
 地代とあてすつばない租税が月繰り上げにやつて  
 來たから

よく熟れるまでおけば倍貫になるんだよ  
 軀をきつさいて賣るんだよ  
 へえ、苦しい中から手前にこのいいものをやる情  
 は持つてゐねえ  
 俺にはすべて確實だ「ゆつばら見て作らせること  
 せえすれあ、何が何だ」て考へた  
 そのかんぶつやの内庭に  
 かんぶつやの親父の出したはんぎりの中へ  
 涼臺から又それさ移された  
 青梨はガタガタと強い音してかんぶつやの親父の  
 手からおりてはいつた

「これは出來ねえ酷い音だ、出來ればこんな音は  
 大しねえ」ていふた  
 きびがいい音だ、親父の頭を青梨で一つ叩き付け  
 た  
 これで何も彼も打ち割つてくれてえ、青梨、青梨  
 とけんとした空から  
 「早生梨、桃だの音は」て強いてきいた  
 黙りこくつてゐるだよ  
 俺は風のやうにしてこんとこを出た

どこの店箱も早生梨ばかりで山に埋つてゐた  
 闘いの歌をもつて全地上を満たせ  
 歌は俺達の力のはちされる彈丸だ  
 明るく暗く大膽に  
 ふち切れる俺達の力を全地上に撒き散らせ  
 打ち出せ打ち出せ、労働の行進曲を  
 眞赤な太陽を胸にかざして俺達の一團は百萬の俺  
 達の一團に結びつくんだ

手塚 武

しん紅の薇薔がよろめいて倒れる  
 花びらは血汐をのせて流れる洪水だ  
 もつともつと遠く—遠く遠く  
 踏みしめた大地に、おい兄弟、俺達の創る巨大な



堂宇の精神を感じよう  
 焔は燃え、燃えて俺達は進む  
 無数の眼が俺達を凝視する、前方には雪に灼けて  
 焔く氷山が俺達を呼ぶ  
 横たわる者、起き上る者、起き上る者、  
 大旗は翻つて俺達は進む  
 打ち出せ、打ち出せ、労働の行進曲を、  
 手、足、頭、胸、俺達の歌は百萬の俺達の方だ

鬼藤平作

くらやみに光り  
 どすぐろく群集の行動は健實だ  
 飢餓、疫病、監獄、死刑、共同墓場  
 さあ兄弟  
 行こう

灰色な世界民  
 憂鬱な被壓迫民  
 死地を革命の旗もて飾れる  
 お、女達・男達・兄弟  
 今こそきた  
 鐵の扉を貫ぬいて  
 あまたの喚聲を含んだ太陽が見える

雑記 (2)

中野勇雄

●貧しき信徒

病人には病人の灰色の美しい幻想がある。  
 死を待つ病人にはまた殊更に氣分の濃い幻想がある  
 だらう。八木重吉は朝な夕なほの白い障子と天  
 井裏とを凝視めながら彼獨りでの境地に灰色の自

由な幻想を享けたのであらう

ひかりとあそびたい  
 わらつたり  
 哭ひたり  
 つきとばしあつたりしてあそびたい (光)

多分瘦せ細つたであらう彼の肉體で、凝視の眼  
 は狂的なけいれんをしたり、車のやうにくるくる  
 廻つたり、石のやうに沈んで行つたりして、社會  
 との現實的な交渉を失つて、自由と云はうか、眼  
 られたと云はうか、そうした世界を遊魂のやうに  
 放浪つたであらう。そして彼がその間にも身をは  
 なさずかき抱いてゐたものはキリストの像であり  
 聖書であつたらう。

(八木重吉氏の遺稿、詩集「貧しき信徒」が加藤  
 武雄氏の手で世に出された。齡三十の若さで死ん  
 だ求道の詩人を謹んでしのぶ。)

●一社會人の横断面  
 これはドラのパンフレット詩集、著者は手塚武

氏である。彼と戸塚の草野心平氏のゐた近衛館で  
 別れてから二年以上も過ぎた。その頃の學生服の  
 彼が今故郷で土にまみれた百姓の姿になつてゐる  
 ことを思ふと感慨がある。  
 生活戦線に立つてゐるものにこそ信實の力がある  
 筆舌よりも腕が確りしてゐるからだと思ふ。この  
 詩集を読んで感じたことはもとの彼よりは強く生  
 活に直面してゐるが故に詩にも現實生活の動きが  
 あるといふことだ。一々の詩については他に幾ら  
 もこの詩集の批評を書く人があるだらうからその  
 人に譲るとして、僕は黙々として地べだの一角に  
 立つて詩を書いてゐるであらう彼の方向を祝福す  
 るものである。

●柴木集

事實は未だ僕も読んでゐないのだが「柴木集」と  
 云ふのは岩波から出版された島田忠夫氏の童謡詩  
 集である。氏は平町の生だ唯一の童謡詩人である  
 アララギ派の歌人である。童謡詩方面に人なき日  
 本に氏の所在は一つの意義をもたらすであらう。

強きローカライを有する氏の童謡詩が大人及子供に讀まれんことを僕は希ふのである。いづれ詳しい感想は讀後の機を待たう。今は單に紹介のみ。

(以上 七月稿)

●十二月一日の記

以上の原稿は混沌氏の菊蔭山で夏と秋とを過ごしてから歸つて來た。今新らしく稿を起さうと思つても手が伸びない。その間に草野心平氏の詩集「第百階級」が出る筈になつた。もう出版の準備は整つたであらうから市場に目ゆる蛙の日も間近いことであらう。その日私は筆を改めて雜記に上場しやう。

●詩の批評

地方の關係から「北方詩人」と「詩南車」の詩に批評がましい筆を執つて見やうと心掛けたのだが残念なことにどつちにも詩がない。といつて私は北方詩人と詩南車とを同一のレベルに置かうと考へるものではないが。

北方詩人では會田毅氏をさるが彼の詩では説明が詩を打ちこわしてゐる。残念だ。私は彼の最近の極度の勉強を羨ましい位に熟視してゐる一人だ。詩南車は御大典記念號なんて銘を打つたから殊更に、詩が集まらなかつたのかも知れないが、詩に對する、現代詩の發展に對する勉強が足りないやうな氣がする。詩はマスター、シヨンではない。

北海道通信

詩の批評のまとははづれたがこれで我慢してもらふ。(十二月一日) 夢はたくさん掻くさい、僕等も今年一反程描いて一僕程とつたのです、昨年とつたのを食べておますが、稲黍なんかよりはつつと食べた後の氣分がいいから體の爲めにいいだらうと思つてゐます。内地にゐた時はどんなに困る時でも、夢ばかりなど食べたことはなかつたが、副食物もたくさん作る、いれ、僕は今年トウキビ五反播いたつたから、随分食べました。トウキビがなくなる頃には南瓜が出来て來ます。毎日大鍋に煮て朝夕、手あたり次第に食ふのです、西洋南瓜で言ふ奴、種類は十種もあるだらう、甘いのは、アリス、甘栗、バナナ、チーブル、クイン

は小さいがたくさんなつて、特異の味を持つてゐます。内地でやつてこれ程良く出来るかどうか種は變換してしもうでサツコロから毎年とるやうにしてゐるのです。形ばかりでなく全く味まで變つてしまふから其の他ハーバート、ホワイトマローなどいふのもある。

こんな悪食動物的な生活をやつてゐるので皮膚の色までへんになり、此の運賃にあきれれる。だが對人生活都會生活でない僕達だから、なかに、ひろい野つばらでしがらせるのさ。

僕達は目下收穫で同様多忙です。刈り物は大豆をのこすのみで昨日は小豆こなしをやりました。本年の收穫は反當五圓とみてゐるのです。五町歩で二百五十圓、その中五十圓肥料、カマス、ムシロ、ナツ代、これだからまんだくいな物を食べるわけに行かないのです。

鹿をしりとり「北海道の自由の生活」なんて言つて笑つてゐるより他ないのです。

然し、兄よ考へてみると精神的には全く自由だ、おやじといつじよにゐた時分の生活からみると、それだけはうるさくなくなつていいと思ふ。

藝術に就いても語りたい、否問ひたいことがたくさんあるのです。でも手紙では氣持が複雑してゐて駄目なやうだ、少し考たり迷ふたりしてゐるのです。プロレタリア藝術の方向に就いて。

いちばん困つたのは、一ヶ月ばかり熊が人家に接近して作物をか荒したことで、今年は山にアドブがならない爲めだらう。トウキビでよと稲黍でござれ目茶苦茶食つてもいふのだ。となりの大

將なんか毎晩 タンタカ、カンガラたたき、きびわるい思をしたらよ。へたに打つたらたいへんだから、中々手を出さないんです。一べんみんで熊狩やつて逃げられ、禁ざられてゐる。ステッキ(毒藥使用)やつたが駄目、アマツ砲(銃が響にさるとひとりで發砲の仕掛)をやつたが駄目。でもとうとうとなりの牧場でアマツ砲で獲つた。(これも禁ざられてゐる)今年この近くでこれで二頭目だ、今度の肉はうまかつた。ヒケマ、こいつはきかない奴です。如に足跡があるので一時はうつかり仕事出来なかつた。もう一頭奥から出て來てゐるらしいのです。

後記

隨分後れた、なんだかんだの事情で後れたんだ、三野も忙しう、俺だつて忙しう、編輯が出来なかつた譯さ、諒としてもらわなければならぬ。原稿はみんな良い、中野のエスマラント譯、草野の譯、外も隨分揃へた積りだ、同へ上遠野が死んだ、俺達は弔意を表す段々寒くなるな、冬眠の用意は俺達を躍出へ導く用意だ

昭和三年十二月三日印刷  
昭和三年十二月十五日發行

編者 福島縣平町仲町 二葉 印刷所  
印刷者 福島縣平町仲町 藤次郎  
發行所 福島縣平町三丁目 柴田書店  
編輯人 福島縣石城郡好間村 混池

釜屋商店

5丁目

TAIRA

電話  
9番



讀書子の忠實な番頭

マルトモ

文 雜 書  
具 誌 籍

平町四丁目  
柴田書店